

身体性評価による価値評価とは

氏名 西堤 優
所属 東京大学

情動とはいったいどのようなものであるのかについては、古くから様々な考察がなされてきた。私たちが情動を経験している際どのような状態にあるのか、また、そのような情動はどのような性質をもち、実際にどのような影響を及ぼすのかなどである。情動に関する理論は、私たちの情動経験を構成するとされる多様な要素の中で、どの要素が情動の本質であるとみなすかによって様々な立場がありうる。現在、情動を巡る哲学的議論においては、情動の本質が、認知的なものであるとする立場と、身体的なものであるとする立場の二つが有力である。本発表では、情動が身体状態によって引き起こされた感受でなければならないという点で身体状態が情動の本質だとみなすJ. プリンツの身体性評価説 (embodied appraisal theory) を明瞭にし、その意義を明らかにすることを試みる。

身体性評価説によると、情動には基本情動と派生情動の二種類がある。基本情動とは、生得的で他の情動から派生しないものである。たとえば、怒りという情動は、その怒りの情動を引き起こした外界の対象が私への侮辱的侵害を行ったという評価そのものである。まさに今、誰かに突き飛ばされて怒る場合、その突き飛ばした相手に向けられた怒りは、その対象が侮辱的侵害を行ったものであるという評価だということである。

一方、派生情動とは、成長にともなって基本情動から派生したものであると考えられる。基本情動からの派生の仕方は二つが想定されているが、ここでは基本情動が判断によって再較正 (recalibrated) される仕方を取り上げたい。判断によって再較正された派生情動は、一見すると判断と身体性評価の両方から構成されているように見える。たとえば、嫉妬という情動は、ライバルが成功したという判断と怒りとよく似た身体状態から構成されているように見える。実際に嫉妬は、ライバルが成功したという認知的判断によって生じるであろう。だが、プリンツによると、嫉妬のような高次認知的情動と呼ばれる情動も、身体性評価と認知的判断の両方から構成されるのではなく、あくまでも身体性評価そのものに他ならない。ライバルが成功したという認知的判断は、その事実の知覚と、基本情動であるような怒りの際に引き起こされる身体状態の間の結びつきを変化させる働きをし、それゆえその身体状態の感受である身体性評価に対して影響を及ぼすのである。この事実の知覚と身体状態の結びつきを変化させる働きが再較正である。つまり、嫉妬という情動は、ある認知的判断によって、基本情動である怒りの身体性評価が再較正されるという仕方で派生した情動なのであり、すなわち身体性評価なのである。

このような再較正の働きは、情動の多様性をうまく説明するのに相応しいものであるといえよう。しかし一方で、プリンツの議論の中では、再較正される際に、身体状態が再較正される前と後でどの程度異なるものになるのかについては明瞭にされていないように思われる。本発表では、再較正の際の身体状態の変化について考察を加え

つつ、身体性評価説における身体状態の役割や意義について考察したい。